

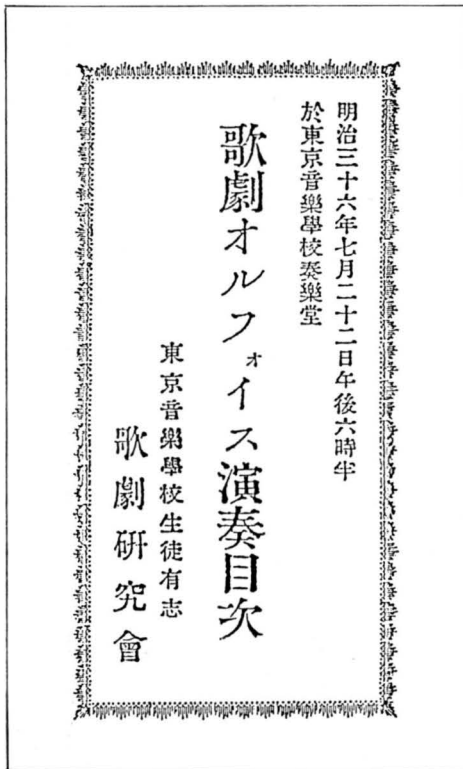
第十節 グルック作曲「オルフォイス」の
上演

左の書面は、東京音楽学校生徒有志の歌劇研究会による「オルフォイス」上演の招待状である。

謹啓 生等過日來ペリイ先生、ケエベル先生指導の下に歌劇オルフォイス研究中の處此度結了致しこれが演奏を試み候間御臨場被下度候

明治卅六年七月十八日

東京音楽学校生徒有志 歌劇研究会



「オルフォイス」上演の招待状の一部

歌劇オルフォイス

グルック作

第一幕 現世場
第二幕 幽界場
第三幕 極樂界場

指揮 ノエル、ペリイ先生
伴奏 博士フォン、ケエベル先生

オルフォイス (アルト) 吉川やま

百合姫 (ソプラアン) 柴田環

アモオル (ソプラアン) 宮脇せん

合唱 合唱

(ソプラアン) 本多かつ、伊澤乙女、金澤やすの、鈴木よし、志賀ちよ

(アルト) 福見ひさ、栗原きん、三浦とめ、鈴木のぶ、天野あい

(テノル) 渡部康三、成田藏巳、島田英雄

(バス) 堤正夫、澤田孝一、横田三郎、高津環

歌詞譯者

石倉小三郎

乙骨三郎

吉田豊吉

近藤逸五郎

注 意

- 一、演奏場手狭に付貴殿御一名の外御來車の儀堅く御斷申上候
- 二、下足の設無之候に付靴或は草履御着用願上候
- 三、所定の室以外喫烟の儀堅く御斷申上候

このオペラ上演は今日でいうクラブの催し物に相当する。訳詞でほぼ全曲演奏し、日本人による最初のオペラとして日本のオペラ史上に金字塔を印した。これは明治三十二年（一九〇〇）に入学して三十六年に本科を卒業した全員と在校生二、三年生の有志が自主的に組織したオペラ研究会の企画であった。したがって学校側はこの企画を承認し、上演会場を提供しただけで内容的には全くかかわってはいない。東京音楽学校にこのような研究会が生れた背景には、明治二十七年（一八九四）に音楽堂において在日外国人が上演したグノーの「ファウスト」の影響があったと思われる。そして東京音楽学校となってからの専門教育が実り、歌うことに関して唱歌から脱皮した時代に到達していた。オペラ研究会には部員である器楽部の渡部康三や山本正夫の友人である石倉小三郎（東京帝国大学文科大学三年）⁽¹⁾が加わった。石倉は東京帝国大学のワグネル会を結成した中心人物であった。オペラ上演のきっかけは部員の渡部康三の兄で大資産家渡部朔（大地主でかつガス会社の重役）が弟の卒業祝いとして一千万の大金（今日の四百万円くらい）を自由に使うようにと出してくれたことにより、この企画が実現できたのだそうである。

オペラ研究会とワグネル会の石倉小三郎との最初の計画では、ワグナーの「タンホイザー」を考えていたようである。当時の日本の文人を中心とするインテリ層にはワグナー熱が盛んであった。ドイツへ留学した多くの日本人が持ち帰るワグナー賛美とドイツ的音楽思考とが相まって、ワグナーは最も偉大な作曲家であった。ワグナーからグルックに乗り換えた事情は明確でないが、増井敬二氏はその著書『日本のオペラ』（民音音楽資料館、昭和五十九年）の中で「ペリーの指導で演奏

の容易さを考慮したのが最大の理由と思うが、そのほかに「オルフォイス」が歌劇改革の意義ある作品であることと、これこそがドイツ歌劇の開祖であると考えたことが大きく作用した」と述べている。いずれにしても彼らの思いはドイツ・オペラであった。

次に「オルフォイス」を上演するまでに漕ぎつけた経過とスタッフについて『美術新報』第三十五号（明治三十六年八月二十日）に詳細な記事があるので、これを掲載する。

歌劇オルフォイスの演奏

縁 樹 生 稿

去る七月二十三日の夜なりき、日本に於ける邦人最初の歌劇演奏は上野の音楽堂に於て開かれぬ。これ實にわが邦文藝史上に重大なる意味を有する事實に非ずや。西歐の思潮わが國に流れてより、國民の趣味漸くかれが文藝の清泉を汲んで改らんとするに當り、最も吾人の刮目を値するものは文學と繪畫に過ぎず、今や樂界の意氣甚だ振へるが如しと雖も、これ慈善なる名の下に、乾燥無味なる音樂會の流行するに過ぎざるなり。この時に當り、藝苑の渴を醫さんとて、東京音楽學校學生諸君二十餘名、清新の意氣を以て歌劇研究會を組織し、先づ近代歌劇の改善者なるグルックが有名なる歌劇オルフォイスを演奏し、以て樂界に新紀元を開けり。吾人は實行に短なる論客のみ多き現時の藝壇に、かくの如き活動起りて將に民衆の趣味を改善せんとするを見て、歡喜禁ざる能はず、吾人は熱切の同情を以てこの擧を祝すると共に音楽學校に於ける有爲なる二十餘名の諸君が、わが邦の思想界に新なる生命を與へたるを深く感謝するものなり。その昔文藝復興の機運に乗じて、南歐の一隅に起りしカッ

チニイの壯學は、實に歐洲藝術界の光明なりき。世界文明の二大潮流なる希臘と希伯來の思想とを融化して近代樂劇の淵源を作りし事蹟は史上稀に見る所なれども、わが邦に於ける歌劇研究會の事業も當に之れに比すべきものに非ずや。吾人は多大の囑望を以てこの會が未來の成功を祈らんとす。

聞く所によれば、この會の起因に二の動機あり。一は明治三十二年音樂學校に入學せる同期生十餘名の團體にして、他は文科大學、音樂學校及び美術學校學生有志よりなれるワグネル會なりと云ふ。去る五月四日同期會の第四回懇話會の開かれし時、音樂學校本科生は歌劇を研究する必要あるのみならず、わが邦に於ても近き未來には必ず歌劇の演奏を要求すべき時期は來らん、ことに聲樂部の者はその歌曲を屢々學べることもあれども、それを實際に演ずること能はざるは憾多きことに非らずや、まして音樂を専門に學べる者にして歌劇を知らずとありては、恥かしき至なり。されば先づペリイ先生指導の下に、歌劇を研究して音樂の趣味を社會に示さん。然れど之を音樂學校の事業とすることは時勢の未だ許さざる所なればとて、この會を起し六月三日音樂學校長の許可を得て、課業の餘暇に練習を始めたるといふ。この時ワグネル會にてもその理想にもとづき歌劇を研究して、民衆の趣味を改善せんと、先づワグネルのロマンチック歌劇タンホイゼルを譯せしが、多くの事情に妨げられて止むを得ず之れを中止し、歌劇研究會と合して歌劇オルフォイスを研究することゝなし、音樂の練習、歌詞の翻譯、舞臺の裝飾及び學校の事情など非常なる困難に逢ひつゝも、終に七月二十三日の夜を以て或る一部の人士にその結果を示すに至れるものなりと云ふ。

なほこの外に特筆すべきことあり。そは渡邊朔氏が、この學を賛し一千圓の財を投じて、この會を補けたることなり。わが邦に富豪多しと雖も、かれ等は自己の爲めにその財を費すことを知るの輩のみなるを、今渡邊氏が文藝の爲めにかゝる大金を捐て、惜まざりし美學は永くわが邦の藝苑の感謝を享くべきものにして、思ふにわが樂界はとこしへにこの保護者を忘るゝことなからん。氏の歌劇研究會に於けるはあたかもルウドキツヒ二世のワグネルに於けるが如きか。またペリイ氏、ケエベル博士及び畫伯山本芳翠氏が身を捧げてこの會に盡力されしことはわが音樂界の深く感謝するところなるべし。聞くペリイ氏の如きはかゝる酷熱の候にも拘らず、早朝より日暮まで學校にありて音樂と所作の指揮をなし、また山本氏を始め、北蓮藏氏、白瀧幾之助氏、湯淺一郎氏、藤島武二氏、岡田三郎助氏、磯谷建吉氏も、芝或は麻布より日ごとに上野に通ひて、筆を執り或は道具を作られしと云ふ、諸氏の藝術に忠なる實に感服の外なきなり。

吾人は之れより筆を書割及び道具立に染めん。書割は山本氏の考案により氏及び湯淺氏、白瀧氏、北氏、藤島氏、岡田氏の執筆に係れりと云ふ。山本氏は久しく巴里にありて、歌劇及び演劇の書割を研究せられしが、幼稚なるわが劇場は氏の伎倆を用ゆることを許さずして止みぬ。然るにこのたび歌劇演奏のこと起るや、氏はいたく此舉に賛し、報酬を拒んで、其書割を擔當せられしといふも、渡邊氏の捐費と共にわが邦歌劇史上に特筆すべきことなり。吾人が知る所によれば書割は一専門の科に屬し普通畫家の描くこと能はず、劇詩、衣服、所作及び道具の調和あるべきは勿論、電燈の配置にもな

かくくに伎倆を要するものにして、歌舞伎座などの書割が、常に不自然にして屢々詩趣を害するは、此等の注意なきに依るなりと云ふ。

吾人は今回の歌劇に於てその書割の立派なるを見て益々日本劇書割の不完全なるを思へり。この演奏は實にわが邦の道具方に少からぬ知識を與へたるならん。吾人はその第一幕の沈靜なる森を見てブリュックネルの畫けるタンホイゼル（第一幕第三齣、第三幕）及びジョツエウスキイの筆になれるバルシファル（第一幕）の書割を見るの心地せり。第三幕は有名なるピュギスがソルボンヌの壁畫に依れるものなりと聞けり。紅の花咲き亂るゝ間に、黄金の光あえかに輝ける様は實に極樂苑をよく表はせり。第二幕は暗かりし故明には見へざりしが岩のかたちものすぎ間にリコポルドの燃えしは眞に地獄の感を興さしめぬ。或人は歌劇オルフォイスの書割を見て帝都第一の劇部と雖も之れに及ばざること遠しと云へり、至當の言なる哉。衣服は渡部康三氏がおほかたの書を調べて作られしものなりと聞けり、色彩配合の巧なる驚くべきものありき。

次に音樂に就て聞ける所を述べんに、今回演奏の指揮者ノエル・ペリイ氏及びフォン・ケエベル博士が我邦の樂界に於て第一流の大家なることは普く人の知る所にして、またオルフォイス、オイリディケエ及びアモオルの役を勤めし吉川やま子嬢、柴田環嬢及び宮脇せん子嬢は實にわが聲樂界に並びなき唱歌者なることは世すでに定評あり、その他合唱に列したる諸君は皆音樂學校の精髓なりといふ。また歌詞の翻譯はすべて文科大學、外國語學校の學生にして、樂を音樂學校に學べる石倉小三郎氏、吉田豊吉氏、乙骨三郎氏、近

藤逸五郎氏の筆になれりと聞く。吾人は曲と調和せざる無意味の歌詞を附して満足せしわが樂界にこの事のあるは祝すべき現象なりと信ず。これ實に斯壇に新なる教訓を與へたるものなればなり。思ふに語脈の異なる歐語を音符に合せてわが國語に譯すことは殆ど不可能の事にして、語脈の全く同じき獨、佛、伊語に於てすら其背馳する所あるを免かれず、まして歐語にて一音符を以て完全なる意味を表はすものも、わが國語にては數音符を要することあり、剩へ音樂の發想、音の高低に對する字音の關係動作の制限ありて、困難いふ方なきをも凌ぎつゝ歌劇オルフォイスの如き大曲を翻譯したるは空前の試みに譯者の苦心思ふべきなり。譯者は完全に原文の意を傳ふること能はざるは恨なりと歎かれしが、そは國語の不完全に歸するのほかなかるべし。嗚呼吾人は以上の諸君が滔々たる迷妄の徒たるに甘んぜず、卓然時流を抜きて藝壇の爲めに盡されしことの、思想界に及ぼす影響の偉大なるものあるを思ひて、感激の意に堪へざるものあり。

舞台装置は背景を山本芳翠⁽²⁾のデザインで、東京美術學校教官の岡田三郎助⁽³⁾、藤島武二⁽⁴⁾と白馬会の白瀧幾之助、北蓮藏、湯淺一郎が實際に描き、磯谷建吉が道具方を受け持った。衣装はペリーの指導により渡部康三がいろいろの本を調べ、三井呉服店（現三越）に作らせたが、経費節約のため多くは女子会員の手製であつたそうである（前出『日本のオペラ』一〇六頁）。舞台上の演出もペリーが行つたが、彼は山本芳翠の天国の情景が気に入らず、パリのソルボンヌにあるシャヴァンヌの壁画のようにしたいということで山本に無断で直してしまつたのだそうである。エウリディケエ役で出演した三浦環はこの思い出を次のように語っている。

何しろ初めての歌劇だと云うので、みんな非常に興奮して、夢中になつて練習しましたが、思い出しても可笑しいのは、背景を美術学校の山本芳翠先生が丹精を籠めて、それはそれは立派なものを作つて下さいました。あんな芸術的に立派な背景は、その後のどんなお芝居にもなかつた程立派なものでしたが、殊に最後の第二幕の「極楽の場」がとても素敵でした。すると、演出のペリー先生が余程夾竹桃の花が好きだったので、その背景に赤い夾竹桃の花を描くと云うのです。すると山本先生が、仏教の極楽には蓮花が咲いていて、迦陵頻伽と云う鳥がとても綺麗な声で鳴くそうだが、キリスト教の天国は仏教の極楽とは違って花など咲いていないから、そんな赤い花など描くわけに行かぬ、と云つて大議論になつてしまつたことでした。それでその日の舞台稽古はとうとうおじやん。こんな滑稽なこともありました。

(吉本明光著『三浦環のお蝶婦人』昭和三十年、一六七頁)

訳詞はワグネル会の石倉小三郎、吉田豊吉、近藤逸五郎、乙骨三郎の四名が分担した。この上演はバレエの一部分をカットしただけでほぼ全曲に近い演奏であつた。バレエのシーンは舞踊の専門家がいなかったためだといふ困つたようであるが、女学校で習つたカドリールやワルツで間に合せたといふことである。

(1) 石倉小三郎(一八八一〜一九六五) 音楽評論家、ドイツ文学者。明治十四年六月十五日東京生れ。明治三十七年(一九〇四)東京帝国大学文科大学独文学科卒業。後同三十九年から二年間東京音楽学校講師となつた。第四、第八、第七各高等学校教授を経て、昭和七年(一九三二)から十六年まで高知、大阪各高等学校校長を歴任、昭和二十八年から相愛女子短期大学教授、音楽科長をつとめた。同二十七年から三十一年まで音楽学会関西支部長をつとめる。著書に『西洋音楽史』『ゲーターと音楽』などがある。昭和四十年十月三十日没。

(2) 山本芳翠(一八五〇〜一九〇六)。明治十一年(一八七二)渡仏、パリ美術学校でジェロームに学ぶ。明治二十年(一八八七)帰朝、芝桜田本郷町に生巧館画塾を開き、二十七年(一八九四)日清役に従軍した時の写生画二十枚を宮内省に献じ、三十七、八年(一九〇四〜〇五)日露戦争に従軍して旅順背面上下歩哨の図を献納、明治天皇の御座所の壁間に掲げられるという光榮に浴した。彼は特に劇の背景改良に意を注いで貢献するところが多かった。明治三十九年十一月十五日、五十七歳で病没。

(3) 岡田三郎助(一八六九〜一九三八) 明治二年一月、佐賀県の生れ、明治二十年(一八八七)十二月曾山幸彦に学び、師の没後曾山の画塾を継承した堀江正章、松室重剛の大幸館で研鑽、同二十五年同館を修了した。二十六年黒田清輝、久米桂一郎の指導を受け、二十九年東京美術学校西洋画科の助教授に任ぜられ、また黒田、久米らの白馬会創設に参加、その会員となつた。翌三十年文部省留学生として渡仏、同三十五年帰朝後は美術学校教授、多くの後進を育てた。昭和十四年九月二十三日没。

(4) 藤島武二(一八六七〜一九四三) 慶応三年九月十八日鹿児島県生れ、郷士の画家山東岳に四条派を学び、明治十七年(一八八四)上京、翌十八年川端玉章の門に入り玉堂を号した。二十三年(一八九〇)洋画に転じ、曾山幸彦をはじめ中丸精十郎、山本芳翠らに師事、のち黒田清輝、久米桂一郎の指導を受けた。二十九年(一八九六)黒田清輝の推挙で東京美術学校西洋画科助教授、同年白馬会の創立に参加、会員となる。三十八年(一九〇五)文部省留学生として渡仏、四十三年(一九一〇)帰朝、教授となる。昭和十八年三月十九日没。

(5) 白馬会は明治二十九年黒田清輝、久米桂一郎らによって設立された西洋画の研究所で、洋画界には最も大きな力を發揮していた。会員に白瀧幾之助、湯浅一郎、藤島武二、岡田三郎助らがいる。

(6) 磯谷建吉、宮沢純一氏によれば「いそがや」は額ぶち商としての屋号で本名は長尾健吉だそうである(『日本のオペラ』一〇六頁)。

(7) 吉田豊吉(一八八一〜一九六一) 独文学者。明治十四年十一月二十八日新潟県生れ、ペンネームを白用という。東京帝国大学在学中に石倉小三郎らとワグネル会を組織、三十六年(一九〇三)『帝國文學』に「ワグナーの歌劇」という論文を発表、翌三十七年雑誌『七人』を発売、帝大卒業後は陸軍大学教官となつた。雑誌『新思潮』を創刊して独立、ドイツ文学や北欧文学を翻訳によつて日本に多く紹介した。昭和三十六年十一月三日没。

(8) 近藤逸五郎(一八八〇〜一九一五) 詩人。ペンネームを朔風という。東京外国語学校で独英伊語を学び、東京音楽学校専科で声楽を学んだ。その関係

から主にドイツ近代歌曲を選び、新しい訳詞を付して紹介した。ウェルナーの〈野なかのバラ〉、シューベルトの〈菩提樹〉、ジルヘルの〈ローレライ〉が有名である。

(9) 乙骨三郎(一八八一—一九三五) 美学者。明治十四年五月東京生れ、明治三十四年(一九〇一)哲学科に籍をおき、大学院で美学を専攻した。上田敏と従兄関係にある。明治三十八年(一九〇五)堤正夫、石倉小三郎らと「樂友社」を設け、雑誌『音楽』を発刊した。同三十九年十月から四十一年九月にかけては『哲學雜誌』の編集委員となり誌上いくつかの論説を発表、美学の研究と紹介につとめた。同四十年(一九〇七)東京音楽学校ドイツ語囑託講師、翌年教授、昭和五年(一九三〇)十二月退官。ロイテル作詞・作曲の〈四つ葉のクローバー〉の訳者である。

歌劇研究会は詳細な解説と歌詞からなるパンフレットを作成して、東京市上野広小路通東文館において二十銭で発売した。また演奏中の写真を三十枚余枚とって、希望者には相当代価で分けたということである(『音楽遊戯界』第八号、明治三十六年八月)。

左の論文は「歌劇オルフォイス」と題して石倉小三郎が『帝國文學』第九卷八号(明治三十六年八月)に寄稿したものである。

我等は獨逸音楽を有し、獨逸文學を有し、獨逸繪畫を有し、其藝彩苑の光に於ては敢て缺くる所なかりしも、未だ純獨逸藝術を有せざりき。とノールが説きたるはワグネルの傑作パルシフハルによりて始めて此目的を遂げ得たりと論破せんとする心なるべけれどかゝる國民劇を起さんとの傾向を音樂史上に求むれば先づ其卒先者としてクリストッフ、ウイリバルト、リッターフォン、グルックを推さざるべからず。

十八世紀前半の苑藝は全く輕佻華美なる伊太利劇の支配する所となりて歌者を第一要素とせる歌劇の特徴は遂に音樂過重の弊を招き

たればグルック出で、其慎重なる考察を以て歌劇に用ひらるべき諸藝術の調和的融合をつとめ以て此弊をためんとせり。少しく古きに遡りて考ふるにヤコッポペリーによりて伊太利の地に歌劇の萌芽を發したるは古代希臘劇の精緻なる研究によりしものにして畢竟文藝復興の餘光を見るべきものなるがグルックは之に次ぎて起りし音樂過重の弊を改めしものなれば彼は一度古き舞臺に遡りてしかも數等高き基礎の上に新藝術即詩的音樂的藝術の地歩を定めたる者といふべきなり

抑もヤコッポペリーとギユーリオ、カッチニ、カオッタビアーノ、リヌッチニの歌詞に譜附けたるオイリディチエ、カトラゲディアペルムジカの名を以て歌劇界の開祖たるの榮譽を得てよりモントヴェルデ。カリツシミ。アレサンドロ、スカラツチは伊太利歌劇界の三明星として各其時代を劃して明光一代に耀如たりき其樂は奔放の熱情と悲劇的發情とは缺くる所あるも婉美と高逸との趣はメロディーの行間に泌みて其和聲の明晰は好樂者流の研究を値して餘あり。然れとも其長處は即短處の宿る處にしてモントヴェルデか減七和弦の不協和音を用ひてペリー式の單調を破らんとしたるも其功なく少しく輕佻浮華の傾向を生しぬ。スカラツチか咏嘆調の改正は近歐樂界にまで影響を及ぼしたるが其抒情分子の偏勝は歌者の勢を恣にする基となりて、所謂カストラート。プリマドンナ等歌妓の勢の昇るにつれて樂家其者の勢力は漸く衰へ行きて當時の歌劇作者は歌妓セネジーノ。フランチェスカ、クツツォーニ等の奴隸となりて彼等の願ふ様にアリアを更むるは勿論延ひては彼等の聲量の範圍や肉體上の特種能力をさへ顧慮せざるべからざるに至りぬ。ベッ

「カリアが音楽よ汝は何をか欲する」と叫びて此状態をなげきたるはよく此間の消息を傳へたりといふべきなり。彼曰く「其歌ひぶりは正しく、其聲は驚くべく華かに、時と柏法とを細心に守りて、しかもながきトリロとカデンツとに於ても少しも呼吸の逼迫を訴ふる様なし。されどわれはなほ問はさるべからず「音楽よ汝はそも何をか欲するとわれは怪む何ぞ其感情をあぐるの力弱き聲に就てはわれ些もいふべきなしされどわが心自らは之を以て意領心解すべきか、われ等か走索者を悦ふは其行動の奇なるにあり、音楽の妙は惻々人を動かすに及びて始て悦ぶ、而して現代の樂家は遂に走索者に終るべきか」と。

一度獨逸思想史をひらきたる者は必ず此國民の特性として全精神界を統一して自ら其王位に居らんとする氣魄の高きに驚くべし、其他の國民か各個の特徵に執着せる間に彼は廣く宇宙の大勢を通覽し、他國民の長をとりて自家の思想を豊富ならしめん事を期せり。シエリング、ヘーゲルの感想の如何に深きかを見よ。ゲーテは希臘の世界を移植し、ルツケルトは東洋思想を融和せり。之を音樂史上に見るも其根跡また歴々として徴すべきものあり、先づ中世にありて此國に重大なる影響を與へたるは伊太利ヴェニス派の音樂なるが後に起りし佛樂の精粹を合せて、止む間なかりし兩主義の葛藤を鎮めて所謂今日の世界音樂の盛觀を呈するに至らしめし功績は、先づヘンデルとグルックとを推さざるべからず

十八世紀中葉に嶄新なる精神生命の盛に獨逸國民の心中に燃えし頃、フリードリッヒ大王とヨゼフ二世とは佛蘭西思想を注入し、當時たゞ歴史的に踏襲し來りし主義なき状態を改めて諸種の方面に活

劇を演ぜんとし、ふるき宗教は漸く消え行きカント出で、純理派の魁首となるに及び古き教理を放擲して人を人として解釋せんとする「新精神は全國民の心中に彌漫せり。後の狂飆時代の萌芽は當時の雲間に隱現して學問藝術の感興は宗教のそれに代り、これまで精神界の君主たりき。新教主義は其主權を學問藝術にうつし行けり。音樂もかゝる一般精神界の變化につれてグルックがクラシック歌劇の發達となり、ヘンデルが近世器樂の創設となるに至れり。

オルフォイス以前の彼か作四十餘種は概ね伊太利式によりしが、此時に至りて今迄用ひ來りし形式の不完全なるをさとり、自由に完全なる感情の發揚を勸むる傾向を生じたれば、此劇の如きは全く自然派の餘澤として生れ出てしものと解すべきなり。思ふに少しくさきラモーの起し、佛蘭西の音樂的戯曲ドラヂデー、リリックや當時其最高潮に達せしヴェニス派のオペラ、セリア等は彼か新劇の前驅たりしは疑なき事實なるも、其革新の大動機をさぐれば彼か改革者としての雄健なる才能は決して没了する能はさるなり獨逸の森林中に生れし自然の子は當時の樂壇に立ちて華麗なる伊太利派を踏襲し、歌妓の驅使に甘んじて其發情と趣味とを制限せられんにはあまりに深遠なる感情と豊富なる發明力とに富みたりき。故に全歐人民か内部生命の必要にかられて漸く自然の境域内にかへらんとせる新機運に乗じて簡素なる發情を自家の特技として此大作をなしたるなれば、ウエルチがなしけむ様に此オルフォイスを自然の福音を傳へたるノイエ、ヘロイゼと比するは俄かに同し難けれど。彼をルソウに比せんはおほかたの首肯する所なるべし。

此曲はオルフェオとユーリヂエの名を以て千七百六十二年十

月五日始めて維納の宮延劇場に演せられたり。多數の聴衆は此樂家と歌詞作者の驚くべき特色に魅せられて、唯其豫想外なるに驚きしのみなりき。

新時代の歌劇を創設せし名譽は樂家と歌詞作者と孰れか之を負ふべきか、將たまた兩者各個の功績の比較などは爰に論すべき限にあらざれども、ラニエーリ、デイフルツアビーギの名は決して輕視すべきにあらず、グルックか自らヌルキール、デュ、フランスの著書によせたる書に曰く此劇の重なる功績は之をカルツアビーギ君に歸せざるべからず、若し余か音樂にして多少世の注意をひくに足らば余か藝術の源泉を發達せしめし君か助力を感謝せざるべからず、彼はオルフォイス。アルツェスト。及パリス等の諸作に於て未だ當時の伊太利人に知られざりし途によりて、余をして深刻なる熱情に定める音樂を作る機會を與へたり」と。故に此二人は歌劇刷新の上と共に力を協せたるものにして、グルックの功績は一に從來用ひ來りし狭き原則をはなれ、深遠なる音樂を以て伊獨佛藝苑の珍となりしクラシック歌劇の基礎を定めたるにありとするの穩なるを思ふ。

オルフォイスか他と異なる點は一に曰く筋の簡明直截、二に曰く發情の活潑隆々たる事、若し後者を以てグルックが功となせば前者は一に詩人カルツアビーギの居るべき地なり。彼既にオルフォイスが物語の精髓をさぐり之をとりて、よしや完全なる戯曲にはあらぬも統一宜しきを得たる歌詞を作りぬ。メタスタシオが作に見る如き從屬の人物所作等は全く之を溝渠に委し、只管筋の發展の愈深からん事をつとめたり、以前の作に於ては徒に錯雜せる事件をとりて繋るに音樂てふ繩墨を以てし、然も其音樂たるやたゞ歌詞の修飾と

なるに止りて決して其思想を深うするものにあざりき。三幕に分たれたる此劇の第一は妻を失ひしオルフォイスが悲歎と彼を求めて幽界に至らんとする決意第二は幽界の人と樂人との争、第三はステュージスを越ゆるまで妻を見じとの契の試み、及びアモールの再現によりて幸福に終を結ぶ大團圓とす。此構成は一方に劇にあらはるゝ諸物象の統一によりて劇其のものゝ威力を強からしめ他方には樂家をして其興趣を保持するを得しめたるが是れグルック劇が伊太利のオペラ、セリアに見る如く事件の盤根錯雜相舐排せるをさけて其英華の渾々涯りなきを致したる所以なり。

其歌詞の音樂的形式を精査して第一に著しきは宣叙調の異様なる事なり。今迄バスとシンバルとの伴奏を以てせる冗長にして力なき乾宣叙調に代ふるに、全管絃部の豊麗なる響を以て其罅漏を補はんとする音樂的表情朗讀を以てし、之を以て嚴密なる樂式によりて充全なる發情を期する叙情的分子との連鎖たらしめたりされば咏嘆調も漸く嶄新なる樂式をとりて例令は第一幕の首に三たび繰返へさるゝオルフォイスが悲歎の聲はアリアなれども寧ろ簡單なるリードの趣を想はしむ。彼は此等樂式の多趣をたすくるに更に合唱と舞踏とを以てせしが、此曲に於てコールの重大なる所以はやがて舞踏をば折々の舞臺の特趣に副はしむればなり。されば第一幕の第一合唱（は短調四拍子モデラート）の幽渺なる響はオルフォイスが奪はれし妻を忍ぶ硬咽の悲愁と相對して其かきわ強く、更に合唱と獨唱との對照は第二幕に入りてオルフォイスとフリエンとの場に於て一層切に劇詩的活火に充ちたる一齣をなせり。幽界の門に立ちてフリエンに拒まれたるオルフォイスがなほもくと迫るくだりは此劇全

部の最高潮をなすのみならず、音楽史上の英華たるを失はず。かゝる簡明なる術もてかゝる力ある劇詩的動作へ効果を収めたるは唯ドン、フォンが精舎の庭の條とフィデリオか獄舎の場あるのみと某音楽史家の論ぜしも宜なるかな。

フリエン合唱の秀拔なるリズムの形式は此劇の發情の力ある所以にして、次に來る正葩なるメロデーと豊麗なる色彩とは天國の靜韻を傳へて、きく人の心ものどけかるべくまた前に述べし、宣叙調の發達は自然感情の餘響と見るべきが爰に天國の描寫に於て器樂の繪畫的描寫の福音を示すに至れり。

エロスの聲の少しく伊太利式の摸型によれる外は概ね彼が特異の樂式を以て清新簡素の雅趣を傳へたるが、第三幕は之に反して全く古き歌劇の様式によれり。愛する者二人が辭争ひの盡きぬ怨は百載の後尙憂愁幽思を寓す。長路浩浩幾多の辛酸をなめ盡して漸く迎へとりし妻が區々の懐にかたき誓を忘れ還顧其歸を窺へば、艶姿空しくきえて浮雲白日を蔽ふくだりに於て、絃聲またさきの高潮に復して殊に管絃樂部の全力を盡したる宣叙調即オルフォイスが「なやみは新に」とよぶに答へてユーディースが歌ふ「なれはも遠し」の歌と次の名高き哀歌「あはれわぎもは逝きぬ。」の Aria とが幽愁限りなき思を載せつゝ悦びふかき大團圓をよぶあたりは蓋し前世紀藝苑の逸品たるを失はず。

余が此不完全なる研究と散漫なる叙述を以て諸君に見えんとするは生平期する所あるにもよれど殊に月の中頃上野の樂堂に此歌劇の催さるべき豫報に促されてなり歌劇史上に於ける此偉人の精彩は之を後に期む。

オルフォイスが上演された七月二十三日は東京音楽学校の夏休み中であつた。また同校主催の上演ではなかつたので一般公開はせず、学校および内外の關係者と父兄を招待して行つた。三浦環の語るところによると、この夜の東京音楽学校は二頭立ての馬車や人力車で大変な賑わひであつた。東京のいわゆる内外貴顕紳士淑女で会場はいっぱいのお客様、「私達は一生懸命でうたいました。日本最初の歌劇は大成功に終りました。今と違つて新聞や雑誌が書く訳でなく、本当の一部の知識階級の間の文化運動に終り、社会的に反響を及ぼさずじまいになつた事は残念でした」と述べている（前出『三浦環のお蝶婦人』一六七頁）。

社会的反響はなかつたとはいへ、いくつかの批評が残っている。

「オルフォイス」上演に対する新聞・雑誌の批評

『帝國文學』第九卷九号、明治三十六年九月

歌劇オルフォイスを觀る

いぬる七月廿三日の夜、上野の樂堂に於て演奏せられし歌劇オルフォイスは先づ成功と稱して可なるべし。眞面目なる藝術の新傾向世に行はれんとする際に方りて、宜しく之を推奨する價值あるは論なし。吾人は本誌前號に於て之に關して意見を述べんと欲せしが、紙數の制限に拘束せられ執筆半ばにして中止せざるを得ざりしが、再び本號に該記事を挿入せんとして紙に臨めば、さしも華麗燦爛の美を恣にせし當夜舞臺の光景すら、今は大方其印象を失ひ、感興また頓に醒めて、思路の迫るべきなし。幾度か筆を投ぜんとして、しかも歌劇研究會の好意を空しうするに忍びず、茲に一言することゝなれり。

第一幕は亡き妻オイリデイイツェの新墓の前にてオルフォイス慟哭し、牧童牧女歌をうたひて詩人を慰め、花を捧げて故人を弔ふ、

終にアモオル顯れて詩人に大神の御旨を傳ふる場なり。紅花綠葉繁り合へる森の景を見せたる書割の美しかりしことよ、燃ゆるが如き紅の幕左に開きて、晝を欺く明燈に照されし舞臺の光景初めて觀者の眼に映せし時、誰かは心の躍然たるときめきを覺えざりけん。オルフォイスの歌聲ははじめの程は低きに傾きし様なりしも、次第に昂上し三幕に續きて其伎倆を振はれたる殊に稱すべしとなさん。

第二幕は陰冥黝暗なる地獄の景を現はし、復讐の女神達黄泉の國に彷徨ひ來れるオルフォイスを防ぎたるも、其歌の力に服して其請を許す場なり。書割は危岩怪石黒闇の中にそそりたつ死の國の景をみせ、折々明滅せし數團の鬼火は凄愴の趣きを添へて觀者の肝を寒からしめたり。此幕は至りて短くとり出で、評すべきこともなければ、女神達の風采裝束一層此世ならぬ様をなし、且もう一ぎは物恐しげに見えたらばやと思はれたり。女神達の岩蔭のさすらひは更に意味ありげに演ぜられてはいかゞ。

第三幕は天國の場なり。地獄の闇より忽然として芳草嘉卉野に滿ち溢れ、天の使達花環を持ち、手をとりはして舞ひ遊ぶ。第二幕との對比は此幕の美をいよく絶美たらしめたり。天園の香に酔うて再び人の世に歸るを忘れたるオイリデイツイエの嬌姿はじめて天使の群にまじりて常世に匂ふ花野のなかに顯はる。遙々と浮世を捨て、戀妻を慕うて死の國に尋ね入りにしオルフォイス漸くこゝに辿り來り、歌の力の應驗にてまのあたりありし人と再會するをえたり。雙思の念、纏綿の情二つの胸に湧き出づ。夫は神の御旨に導ひて後ふり向かで歸らんとす、それに追従する妻は夫のつれなきをかこちて怨嗟の聲は口に逼り、無念の涙は目に溢れざらめや。本歌劇

の高潮は正に此時にやありけん。流石のオルフォイスの決心弛みて、あしき妻の魂魄は再び天に飛び去らんとす。時しもあれ、アモール忽然として顯はれ、死せるオイリデイツイエを蘇生せしめ、合唱のうちに幕閉ぢたり。

要するにこの歌劇は邦人によりて演奏せられし第一回のものなり。明治廿八年の頃とかや、京濱の洋人發企して、これも上野の樂堂に於て、ファウストの歌劇を演じたる事ある由なれども、指揮者エッケルト氏を首として演奏者何れも洋人なりしといへば、此歌劇は其成功と失敗とを問はず、嚆矢たる光榮を擔ふものなり。短時間の準備を思へば幾多の欠點は之を看過するを至當とすべし。當夜の花形演奏者吉川、柴田、宮脇三氏の勞や、歌劇研究會員一同の精勵や、巨資を投じて本劇をして實行あるをえしめし渡邊氏の義俠や、石倉、乙骨、吉田、近藤、四氏の歌詞翻譯の功や、ペリイ氏、ケール博士の助力や、及び山本芳翠氏以下幾多畫界名流の勞力の寄興等はよろしく皆廣く世に傳ふ可き也。

吾人は此新企圖は全く一時の好奇心に因せるものに非ずして、熱實なる藝術心に深き根底を有し、單に一二回に終らずして末永く實行せられんことを切望し、又聽衆の趣味開發するの曉には、之を邦語に譯せずして、原語に於て朗唱するを得策なりと思考す。翻譯に費やす勞力と時間とは蓋し豫想外に大なるものあらん。之を原詩その儘に朗唱するに於ては、譯者の勞を省くと共に原詩固有の音聲の美を十分に發揮するを得べし。

當夜の聽衆無慮數百に達し、首都文藝の各社會は遺憾なく代表せられしに似たり。始終靜肅を守りしは怪むに足らざるが、幕の開閉

毎に拍手喝采殆んど堂を揺かす程なりしは、演奏者に對して讚嘆の情を洩したる積なるべきも、これ甚だ失當の行なりといはざるを得ず。器樂の伴奏は常に開幕前に始まり、開幕後に及ぶ。然るに聴衆にして幕の開閉毎に拍手すれば、伴奏者は絶えず奏樂の中途にして妨礙を蒙ることゝなる。聞くが如くんば、泰西諸邦のオペラ座に於ては大抵聴衆の喝采を嚴禁すといふ。獨逸バイロイトのワグネルのオペラ座に於ては、只最終幕の閉づるをまちて之を許すといふ。本邦の聴衆も又須く此一事を思ふべきにあらずや。(局外生)

『讀賣新聞』明治三十六年七月二十五日付および二十六日付

双方とも東儀鉄笛が担当した。

オ・ペ・ラ・會 音樂學校學生の催しにかゝるオペラ會は一昨夜午後六時半より音樂學校内にて舉行されたり。演題はグルツク氏の傑作「歌劇オルフォイス」にして全三幕(現世場、幽界場、極樂界場)なり。歌詞譯者は文科大學在學生諸氏にて、指揮者にはノエル、ペリー氏伴奏にはケーベル博士自ら勞を執れり、書割は山本芳翠氏主となり非常に意匠を凝らし幽界場など人目を驚かすものありたり、尙この會は同學校學生渡邊康三氏自から多額の資を投じて催ほしたるものにて、學校は關係せざる由尙又この度は公開せしにあらざして、只學生の父兄等を招待して觀覽を許せしものなるが、未だ演技の一致を欠き所作の拙なる失はあれど、我國人のオペラ會は殆んど今回を以つて始めとすべし

〔七月二十五日付〕

歌劇研究會短評

鉄 笛

豫て噂のあつた東京音樂學校生徒諸氏の組織に係る歌劇研究會は去廿三日の夜同校の樂堂で開かれた。從來歌劇の企てのなかつたのは吾音樂會の缺點である。とまで好樂家の間にいはれて居たのであるが。近來樂界の氣運一轉。いづれの音樂會でも必ず大入を占めるといふ盛況に乗じて。この會が起り樂界に一新生面を開かんとする現象を呈したのは誠に喜ばしき次第で吾人は大にうれしく感ずる。ドーカ會員諸氏が今日の熱心をつゞけ前途ますます奮發して貰ひたい。さて當日の演題は「オルフォイス」で。有名なるグルツク氏が千八〔注、七の誤り〕百六十二年に古代希臘の神話に基づきて作曲した現世界。幽冥界。極樂界と都合三幕のものである。吉川嬢の「オルフォイス」はこの劇の主人公たる丈ありて音量も充分あり三時間にも渉る長き曲を毫も音聲に障りなく曲節廻しも立派にしてのけられたのは全く平素の修養が現はれてうれしい。ことに第三幕目の「百合姫」との聯唱は就中美事でした。思入の充分ならざりしと「レチタティーブ」に於ける言語のやゝ明亮を欠いたのは惜しいが曲の上についてはいづれの幕も悉く力の籠つて熱心に唱はれたは感心。宮脇嬢の「アモオル」は大切のときよりは第一幕目の「オルフォイス」との掛合が思入もあり發相もとのひ結構だ全体この役は儲け役で「オルフォイス」の様に初中終顔を出してゐるのでないから左まで身振の苦心も要らずしかも聴衆からは歓迎せられる。それにこの嬢の所業は中々巧者な所があるから一層引立つた。

柴田嬢の「百合姫」これは全く適當役だ。この嬢はかねて音聲の美しくいと容貌の美しいので評判があつたのであるがこの日は一層麗はしく感じた。この後いよく研究を積まれたら必ず性來の

美聲は一段の妙趣に入り將來歌劇の好歌者として充分に成功されるであらう。が態度については何分初舞臺のことであり充分にいかぬ。ことに日本婦人の舊理想「かぢみ女」的型^{タイプ}とでも申さうかキリツトしない此点につきては一工夫して貰ひたい。

合唱は第二幕目の幽冥界の場より段を逐ふてよくなつたドーいふわけか第一幕のときはやゝ聞劣りがした様だ。

全体曲の演奏についてはいづれの幕も上出来であつたが。身振については受取兼ねる點がある大に工夫を凝して貰ひたい。勿論是につきて彼はいふのはチト野暮ではあるが「オルフォイス」や百合姫の身振は別として譬へば第一幕目の牧女牧童の合唱の群が百合姫の墳墓に花を捧げる場また第三幕の始めの所作の如きは身振といふのではないがいかにも不統一だ。それに牧童の骨格逞しきはそれ結構ではあるが五分刈頭の薄衣につままれたはチト面黒過はしないか。あまり赤裸々では全体の美觀が殺げる様に思はれ配合上いかゞものか化粧法もまた大に研究する必要があらう。兎に角今回の催しはこの會のいはゞ瀬踏でありまた聞くところによればこの曲の練習も全く短日月に仕上げたものだといふのに係はらずこれ迄に演奏されたのは末頼母しい。願はくはこれを手始めとして大に奮ひ給へ。この次は「ローヘングリン」を纏めらるゝとの噂さがある樂しみにして待てゐます。

〔七月二十六日付〕

(一) 東儀鉄笛(一八六九—一九二五) 明治二年六月十六日京都生まれ、雅樂家、新劇俳優、本名を季治という。明治十二年(一九一九)より宮内省雅樂課に勤務するかわら、東京専門学校(現早稲田大学の前身)文学科に入学。三十年(一九一九)宮内省を退官後帝國教育會事務長、ドイツ學協會分校幹事、早大講師などを歴任。三十五年(一九〇二)頃から坪内逍遙の新劇運動に

参加し、俳優として名を挙げた。雅樂のほかに洋樂をも修め、オペラ「常闇」(一九〇六)、早大校歌(都の西北)などを作曲している。大正十四年二月四日没。

明治四十一年(一九〇八)「オルフォイス」再演の計画が立てられた。ところが学校当局は東京音楽学校の風紀問題で文部省からきつい達しがあつた直後でもあり再演を禁止した。この禁止について二つの論評が出されている。

『教育時論』第八三二号、明治四十一年五月二十五日

歌劇中止の真相

東京音楽學校にては本月を以て、ゲルツク作歌劇オルフォイスを演奏せん計劃にて、それ〴〵準備進行中、之が中止の報突然世間に傳はりしより、風紀問題の喧すしき當節のことゝて、世説は直ちに文部大臣若しくは、文部省が之を禁止したるならむと想像し、一時その方面の人々を騒がしたるが、其真相は左の如し。

△元來同校にては當歌劇中の詞譜等をば、平日それ〴〵教授されるも、フレック嬢來任して、之を組織的に演ぜしむるを以て、教育上至當なりとすとの説を立て、校長以下之に賛同して愈々演奏することゝなり、背景は巴里のものを採用し、衣服は三千圓にて某商店に注文し、嬢を始め外國人教師、同校教師數人と、之に外國人等の助力を得て、その振り付け等に熱心しをりしなり。

△而して元來歌劇は、夜間興行と定まれるものなるが、かくては種々の世説ある今日青年男女を會して夜間戀の劇を演ぜしめたりとありては、甚だ穩かならざれば晝間開劇と決せしも、倍困難なるは

電燈装置にして、之が爲めに一の發電機を特別に使用するは、非常なる經費を要することなり、次に又本月末若しくは六月に入れば、既に氣候その宜しきを得ず、又如此事に慣れざる我男女學生は、其伎洋人等の意想外に遅々たること等ありて、校長及内外教師等一齊に、之が延期に同意したるなりといふ。

△かゝる故に文相若しくは文部省よりして、之が中止を命じたることは無しといふ、然れ共湯原同校長曰く「尤も文部省の側で多少異論のあるのは事實だ、官立學校で歌劇などをやらせると、地方の學校が眞似をする、普通の學校までが遣り出すと困るといふのが其言分だが、自分も地方に居た事もあつて、某弊は確かに認める、併し藝術教育と他の教育を一樣に見る事は、文部省でも考へねばならぬ、藝術教育が必要ならば、道德の範圍内で飽までも藝術の研究をするといふ事は許さねばならぬ、歌劇中にも西洋の物を、直に日本で演じられないものもある、其取捨は學校でやる、決して舞臺の上で、男女が接吻をやる様な事は採用せぬ」

△右の如くにして、同校にては、歌劇と演劇との區別を論據として、某氏に對し、今年中には必らず開演すと言明せりといふ。

『音楽界』第一卷八号、明治四十一年八月

歌劇中止に就て

加川 琴仙

古來文藝の發達は社會狀態の變遷に伴ひ保護を得る期あり亦迫害を受くる期あり進歩の徑路簡ならば總て事實に於ても齎しく歴史の傳ふ所なり、我邦に於ては先年白馬會問題の如き美術界の一大事件あり、近くは文學界のみならず社會の喧騒を極めつゝある自然主義

にして客觀的觀察の如何は措きて作者の立場より見れば確に文藝に加ふる迫害ならん、されど吾人は不幸にして同派文士の主張に首肯する識を有せざればこれに制裁を加ふる爲政者の是非を斷言する能はざると雖も彼の歐文界の傑作モリエール物にまで及ぼせしに到つては如何に無文の徒と雖も吾人は警視廳の神經過敏の程を測知するに難からず。然れどもこは檢閲官の眼中に文藝なく隨つて作品を観察なす根本の思想觀念が作者と相容れざればなり。然るに此等の餘波は唯に著作物に止まらず尙一層吾人をして文藝の前途に甚大なる危惧を抱かしむるものあり。そは比較的工藝上の識見を有する筈なる文部省より音楽學校の歌劇に中止を命じたることこれなり。

吾人が耳にしたる事實を述べんに近時文部省より發したる訓示に學生は一切男女合併劇を演すべからずとの趣を各學校へ通達すると俱に特殊の性質たる音楽學校へも達せられ、計畫既に成りたるオルフォイス劇は此訓示に抵觸するものとして斷然差止を命ぜられたり、同校は勿論聞くもの呆然たりしがユンケル、ハイドリヒ、フレック其他の諸教師は決然連袂辭表を出したれば文部省の狼狽一方ならず一時の彌縫策として經費の都合より延期したるなりと辨解せり。歌劇は音楽の藝術としての生命にして、この演奏は音楽者の使命なるのみならず今や我邦は具體的文明の域に入らんとして歌劇舉行の要求に迫られつゝあるなり。

音楽學校の存在を是認せる文部省當局者に向つて今更歌劇の如何を説明する要なく唯吾人が解釋に苦しむ所以のものは教育を司る文部省と犯罪を司る警視廳と何等撰ぶ所なく。文部當事者が宛然文藝上無識見なる警官の態度に出でしは吾人の痛歎に堪えざる所なり。

文部當局者にして無學識なりと假定するも彼の自然派の思想と何等相關聯するものある乎。歌劇は極めてミソロジカルにしてレチタテーフと云ひバレットと云ひ凡て微妙なる音樂の支配に據るものにてこれを聽き視るものは音樂と詩歌のエネルギーに自己の意識を奪はれて歌劇上に顯はれたる高遠なる樂趣に同化するものなれば登場者が男女なるが故に云々は全く歌劇を解するの能力なき卑近なる性格の者にして始めて發し得らるゝ言葉なり殊にオルフォイスはサブライムの分子に富める獨逸派祖始の作曲にてギリシヤ神話の眞善美を盡したる構想なれば高雅なるは言を俟たず。故に當事者は作品に容喙するにあらざるものと信ず、要は男女登場にあれば作品上に深遠なる樂論を戦はすの必要なし問題は輕きが如くにして波及する所大なり。されど解決は唯々たるものなり。

苟も國庫を以て音樂振興の畫策に與かれる當事者にして常識を有しなば自己の見地を顧み藝術眼を以て歌劇を觀察しなば中止命令の如き暴擧をなし能はざるものなり。而も敢て命ずるに於ては當事者が自己の職責を全ふすに恥かしからざる學識と頭腦を有する乎頗る疑はしきものにて頑陋なる一輩の固持する中止説は隱然省内に勢あれば今秋の舉行果して無恙なるや吾人憂懼なき能はざるなり。

之れ音樂の發展を阻止するものにして藝術に對する迫害にあらずして何ぞや

見よ！、佛蘭西のプライドとする所のものは裁判所にあらず議事堂にあらず即ち壯麗なる國立グランドオペラにあらずや獨逸人の剛健なる民族性を涵養せしもの、保護獎勵により發達を極めたる獨逸藝術の致す所多きにあらずや、

近く大博覽會開設を見るに到り我物質的進歩に比すべくもなき樂界の寥たるは吾人の一大恨事となす所。況んや今又歌劇中止を聞くに於ておや。

我樂界の前途愈々遠し、健實なる覺悟なかるべからず、本問題の成行を顧慮するの餘り茲に所感を述べて當局者の覺醒と樂家の奮勵を促す（六月廿日）

その後東京音樂學校でオペラが上演された記録はない。昭和三十一年東京芸術大學音樂学部オペラ研究部の第一回公演「椿姫」は、「オルフォイス」以来五十三年ぶりのオペラ上演であった。